

生 *Seikatsu Bunkashi* 史 生活文化

<史料館だより>

目 次

- ◇古地図に見る有馬への魚屋道…………… 大国 正美 (2)
- ◇深江物語 (10) …………… 森口 健一 (6)
深江の旧国道 (新道) の家並みや店舗
- ◇深江にあった戦争 3 …………… 深 江 塾 (14)
- ◇阪神電車の高架事業で変わる深江の風景…………… 藤川 祐作 (20)
- ◇史料館この1年を振り返って…………… 史 料 館 (23)
- ◇史料館日誌抄…………… 道谷 卓・藤川祐作 (24)

2020.3.31
NO.48

昭和12年に完成した本庄小学校の鉄筋コンクリート造校舎。当時深江在住の医師福田賢二さんが昭和13年11月下旬に撮影した(福田憲子氏寄贈)。人々は校門で深々とお辞儀している。昭和12年に校舎の前に設置された黒い扉の奉安殿に対する敬意だろう。中には教育勅語や天皇の御真影が収められていた。当時の人々にとって校内は「聖地」だったのである。(奉安殿は本誌35号、福田医師略歴は本誌42号、47号参照。なお黒田賢二とあるのは誤りでした。おわびして訂正します)



神戸深江生活文化史料館

古地図に見る有馬への魚屋道

館長 大國 正美

明治以前の古地図は、近代の地図と違って正確な測量をしたものばかりではない。ただ比較検討すると、時代の変化が見て取れる。魚屋道を軸に有馬への道の変化については、『歴史と神戸』三三六号や、昨年末出版した『古地図で楽しむ神戸』（風媒社）でも触れたが、紙幅に限りがあったこともあり、絵図・地図を十分に紹介できなかった。またこのたび、六甲山の研究者、前田康男さんから六甲山の戦前の地図の提供を受けたので、改めて変化を絵図や地図でみてみよう。

近世初頭の有馬への道

図1は江戸幕府が作成を命じた慶長十年（一六〇五）の年号のある「慶長国絵図」（にしのみやデジタルアーカイブより）の灘地方から有馬にかけての部分である。図1のやや左上に「湯山」とあるのが有馬で、主要な街道は有馬の北を走り、生瀬から船坂―山口（いずれも西宮市）を通過して二郎（神戸市北区）に向かっていく。有馬へは船坂から細い道が描かれているだけである。図1の右下端が芦屋川、その西の楯岡が地名の記載は漏れているが深江村で、魚屋道はもちろん灘地方と有馬を結ぶ道は描かれていない。

深江の北側には西国街道が描かれているが、この道の太さと山間部を通る生瀬―船坂―山口―二郎の街道がほぼ同等の太さで描かれている。加えて、生瀬、東船坂、金谷寺付近の街道に「・・」印、すなわち一里塚があることにも注目したい。慶長年間はまだ全国統一的な一里塚を整備する以前なのに、この時点で山間部の街道にこれほど密に「一里塚があるのは驚きだ。中世末から近世初頭にかけての京都から摂津北部を通過して播磨に抜ける街道の重要性がうかがえる。



図1 「慶長国絵図」にみる六甲山（にしのみやデジタルアーカイブより）

魚屋道は禁じられた間道でなかった？

深江から六甲山を越えて有馬温泉へ向かう魚屋道などは、江戸時代、幕府や尼崎藩から違法とされたといわれてきた。魚屋道がどう絵図に描かれてきたのかを見てみよう。魚屋道が絵図で初めて確認されるのは、正保元年（一六四四）に幕府に作成を命じられた「正保国絵図」である（図2、国立公文書館蔵）。「正保国絵図」の原本は残っていない

いものの、筆写されたものが何点が残っている。このうち明治十四年（一八八二）、美濃国の元岩村藩主松平乗命が明治政府に献呈した「正保撰津国絵図」に魚屋道が描かれている。
 中央上部が「湯山村」、すなわち有馬でまっすぐ南に下って森村に至っている。道はそこで止まっているが深江まで続く魚屋道であることは疑いない。



図2 松平乗命本「正保撰津国絵図」（国立公文書館蔵）に描かれた魚屋道



図3 魚屋道には「難所、牛馬往来不成」と書かれている

魚屋道は難所だったようで、「此道三田間難所、牛馬往来不成」と牛馬の往来はできないと書いている（図3）。唐櫃から魚屋道に合流する道も描かれ、こちらは「常二牛馬往来難成（なりがたき）」なので、「往来ならず」より道はまじだったようだ。「国絵図」には住吉から登る住吉道などは描かれておらず、尼崎藩や江戸幕府は湯山間道の中で魚屋道を最も重要と考えていたと思われる。「国絵図」に描かれている以上、存在が否定された道だとは思えない。

たしかに寛文十二年（一六七二）には西宮・生瀬（以上西宮市）・伊丹・尾陽（以上伊丹市）・小浜駅（守塚市）の馬借が、有馬の庄屋・年寄を相手取り「浜御影村に新聞屋を設け有馬との間で新道を作って旅人と諸荷物を運ぶ者がいる」と、大坂町奉行所に訴えを起している。馬借たちの主張は「有馬海道は、丹波口・兵庫口・京口の海道三筋」であるとしている。また西宮の馬借は尼崎藩領だったので、尼崎藩の家老衆にも訴えたところ、浜御影村の者を呼び出し、「荷物并旅人之宿」を今後禁じる申し渡しをしたという。

しかし、尼崎藩の申し渡しが事実だったとしても、六甲越の湯山間道がこの時、全面禁止されたのではないだろう。幕藩法は「祖法墨守」であり、現状肯定主義である。前例があれば通行は認めただろう。

「国絵図」に描かれ次第に整備？

図4が「元禄撰津国絵図」で、右下端に深江村、西国街道を挟んで北側に森村があり、北に魚屋道が延びている。西に行けば住吉村。有馬道が描かれていない状況に変化しない。しかも魚屋道について「牛馬の往来ならず」という「正保撰津国絵図」にあった注釈がなくなっている。「天保撰津国絵図」でも同様である。また元禄十四年（一七〇二）の地誌「撰陽群談」には六甲越の道を「鬼原郡森村へ出る」と書いていて、当時の地誌にも堂々と登場している。近世では魚屋道が湯山間道として最も利用されたことを裏付けている。



図4 「元禄園絵図」(国立公文書館蔵)には「難所」の記載はない。

天明六年(一七八六)には深江を含む本庄九カ村が道の修復に協力することや、「奥筋揚ヶ駄荷物」を運ぶために牛の数を定める申し合わせをした。申し合わされた牛の数は、深江には一〇頭、本庄九カ村では計一八九頭の牛を置くことで合意している。「正保園絵図」では牛馬



図5 「六甲・摩耶・再度山山路図」(前田康男氏蔵)に描かれた畑の場(図中央やや上の○部分)。道がここで枝分かれし山中の要衝だった。

が通れない山道が、大きく様変わりしている。また本庄側には「違法」という認識がまるでない。

しかし天明八年には青木浜から湯山への往来が、宿駅側に見つかり差し押さえられるトラブルが起きた。それでも本庄側は違法という認識がなく、文化二年(一八〇五)には、森・中野(以上神戸市)・三条・津知(以上芦屋市)の庄屋が尼崎藩に魚屋道の途中の畑の場に荷置き場を設ける申請を出した。北畑村から有馬へ「二十年以来折々道造り」と、道の整備を続けてきたことを主張している。さらに「三田井在郷より牛馬之通路も相成」と、三田近辺からの荷物の往来を予想している。翌文化三年には小浜・伊丹・生瀬・尼崎の宿駅役人たちが道を広げることに対して裁判を起こすが、あいまいなまま決着している。紛争は安政六年(一八五九)・文久二年(一八六二)にも再発した。魚屋道はずっと使われ続けたと考えるとよからう。その魚屋道の畑の場を描いた地図が直木重一郎編纂「六甲・摩耶・再度山山路図」



図7 「六甲—摩耶—山路図」大正14年発行、昭和2年増補、前田康男氏蔵

（図5、前田康男氏蔵）である。丸印で畑の場を示した。畑の場からは西の住吉道に向かう道、少し北には東へ向かう道もあって重要な分岐点になっていることが分かる。

しかし、明治七年（一八七四）になって住吉駅が開通すると、道の地位は大きく変化する。魚屋道はすたれ、住吉道が脚光を浴びることになる。図6は大正十一年（一九二〇）に「日本交通分県地図 兵庫県」（神戸深江生活文化史料館蔵）に掲載された六甲山。住吉道だけが描かれている。図7は大正十四年発行、昭和二年増補の「六甲—摩耶—再度山路図」（前田康男氏蔵）。深江は描かれていない。



図6 「日本交通分県地図 兵庫県」（神戸深江生活文化史料館蔵）には住吉道だけが大きく描かれている

深江物語 (10)

深江の旧国道(新道)の家並みや店舗

深江塾 森口健一

東町の家並み

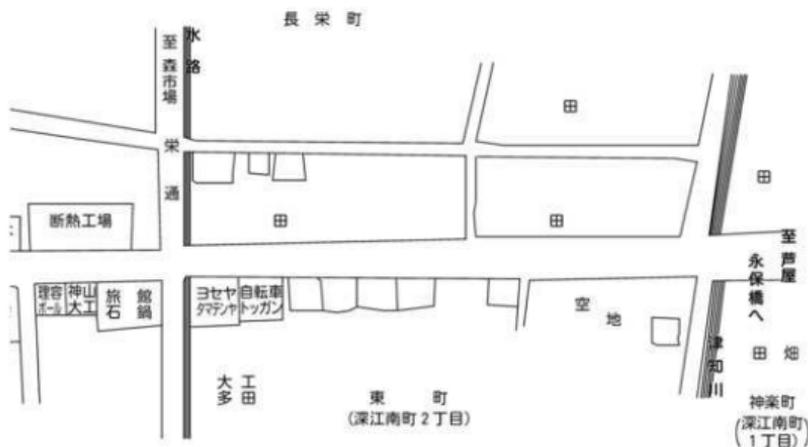
昭和二十年代の後半から同三十年代の深江を東西に通っていた、いわゆる旧国道(新道)を東から西に歩いてみる。

芦屋方面から深江に入ると南に神楽町(現・深江南町一丁目)、北側が永江町(現・深江本町一丁目)である。新道の北側の永江町(現・深江本町一丁目)には畑と田が混在して広がっていた。新道に沿って東西に水路が西にむかって流れ、淀みには「あかはら」と地元の子どもがよぶ「イモリ」が水底をもそもそと動いていた。この水路の源は阪神電車軌道の北にある通称「皿池」(現・宝ヶ池)である。

神楽町を南に見て津知川を越えると東町(現・深江南町二丁目)に入る。新道の北側は長栄町(現・深江本町二丁目)で新道に沿って北に水田が広がり、初夏から夏にかけてはカエルの合唱が聞かれた。

南側には見附町(現・深江南町三丁目)との境界までの一帯に二〇戸ほどの住宅が密集していた。この住宅については、「住んでおられる方の多くは終戦前後(昭和二十年前後)に四国方面からやってきた人たちであると聞いている」と、この住宅のそばに住んでおられた姫路西高校の英語教師をされていた足立先生(名前は未詳)のご家族から昭和三十年代半ばに聞いた。

これらの住宅が新道に沿って東西にならんでいるうち、交差点から東に二軒目に通称「トッカ」 という男性が自転車屋を営んでいた。新品の自転車は殆どなく中古品の黒い自転車が並んで売られていた。



昭和20年代の「新道」

深江南町2～4丁目目録



写真1 昭和29年航空写真 札幌通～栄町

日常はバンク修理などがおもな仕事で修理に使用する「ゴム糊」の匂いにつられて子ども達がよく店を覗いていた。
 自転車屋の西隣が「よせや」である。今日の廃品回収の店である。



昭和29年の航空写真などを参考に藤本吉江氏より聞き取りを基に作成 平成30年9月

店は十間で奥のほうには銅線の巻いたもの、錆付いた鉄製品が積み上げられている。子どもたちは何日もかけて集めた金属類をこの店に持ち込んで買い取ってもらっていた。子ども達にとってはさきやかではあるが「お小遣い」になった。ちなみに銅は「アカ」といい、買い取り値段は銅、真鍮、アルミの順であった。子ども達は「アカ、シンチュウ、ボロ（アルミ）」などといった。くす鉄や銅などがこのような店で子供たちからでも買い取るとる背景には、昭和二十年代後半の朝鮮半島における動乱（戦争）があった。軍需製品のために金属類が高騰したためである。

この店の名前は不明であるが、子供は「テンヤ」と呼んでいた。この店にかぎらず古物を集めて廻る人を大人はタマテン屋といった。この店も古物を取り扱っていたから店も「タマテン屋」といったようである。子ども達は「タマテン」の一部から下の「テン」だけで呼んだのである。「タマテン屋」の名の由来は、古物を店で買い取らず地域を廻って各家庭から買い取っていくときの呼び声が「タマテンか？」「タマテンか？」と叫び続けたためである。「古物が溜まっていないか」という意味である。今では「家電の回収車です」とスピーカーでまわっている。この頃は車ではなく自転車であったという違いだけであろう。

見附町の家並み

南北のとおりを西に進む。森市場（現・サテイ）の方から流れてくる水路のある道を渡ると見附町（現・深江南町三丁目）になる。

道路西角に、「ホワイト」という喫茶店があった。この喫茶店の営業の始まりや閉店廃業時期についてはその名だけで詳細は分からない。深江の新道沿いにあった唯一の喫茶店であった。店の名のとおり屋根をのぞいて建物全体が白くペンキ塗りであったため人の記憶に残っていたのであろう。

喫茶店の西隣に旅館「石嶺」があった。旅館とは言うものの大きな

看板を上げておられるわけではない。利用者は「西国三十三箇所めぐり」の巡礼者、お遍路さんであったという。そのためか地元の人でもその旅館の存在や内容を知る人は殆どいない。

旅館に並んで「神山大工」の店。この家は大工の仕事と農家の兼業で、店とはいふものの看板などは上げていなかった。

農業は神楽町（現・深江南町二丁目）の岡田家の土地を利用（借り）しての農業である。この岡田家の農地は現在では「神戸市深江南住宅」の敷地となっている。

「神山大工」道角に理髪店。看板は「ボール理容所」と掲げている（写真2）。店内には理容椅子が二セットあったが、仕事は店主一人であった。この店の利用者はボール理容所とはあまり呼ぶ事はなく、店の



写真2 ボール理容所（飯田春美氏提供）

の主人の「山根」の姓で「山根の散髪屋」といっていた。人によればこの主人は「気難しい人」で利用者の評判は好悪に分かれたという。

この理髪店の西の南北の道を渡ると、「飯田米穀店」である。新道沿いの家屋としてはかなり大きい。店は新道に面して開いている。店内には奥に天井まで届くほどの金属製の大

きな精米機があるのが印象的であった。この飯田家は、深江では有数の大きな地主の一つで、「一族縁者が見附町（現・深江南町三丁目）の海岸近くにあった「深江魚市場」を創設されたことでも知られる。魚市場は「飯田の魚市場」とも言われていた。

飯田米穀店の西側に家屋に沿って小さな南北に流れる水路があった。水源は不明であるが、きれいな水で近所の人は時期が来れば「隙子洗い」をこの水路で行っていた。戦後まもなく水路は暗渠になったのか廃止されたのか、今では家並みの中に消えている。

更に道に沿って西には「極楽寺」、「近澤」、「藤本」、「西尾・中島」と民家が並ぶ。民家の並ぶ西の先に「永井ブリキ店」。この店は国道四三号線が完成してからも営業を続けていた数少ない店でもある。近隣の工場からの発注をもとに、手作業で「桶」「ダクト」などを製作していた。

ブリキ店の西隣に「葬儀屋」と近所の人が呼ぶ家屋があった。店の名前も不明で詳しい業務は近隣の人も分からない。ただ薄暗い店の奥には葬儀に使う「櫓」がいつも数組置いてあった。それで葬儀屋と人は呼んだ。

「葬儀屋」の西が「播磨屋」という古道具店。店の中には鍋、釜などの日常生活用品から手作業用の農機具までが並べられている。一見すると雑然と積み上げられているようではあるが、それなりに商品がグループ分けされているようではある。

この店が地元で知られるようになったのは映画の撮影に使われたことによる。昭和三十一年のことである。映画は谷崎潤一郎の小説「猫と庄三と二人の女」を原作とする同名の映画である。原作では「庄三」の店は芦屋・打出の「荒物店」となっている。庄三には森繁久弥、二人の女のうちの前妻に山田五十鈴、後妻には香川京子が扮した。どれほどの頻度でこの「播磨屋」がロケに使われたのか定かではないが、

撮影があるたびに人々は群がって見学していたそうである。おそらく深江では初めての映画撮影であり複数のスターがこの地にやってきたから人々が関心を寄せたのは自然である。映画の配給会社は「東宝」であった。

「播磨屋」に並んで西に「深江消防団」の屯所がある。昭和二十年代の屯所は今と違って木造一階建ての付近の民家と大きな違いはなかった。消防団の建物と分かるのは、家屋のそばに鉄骨の「火の見櫓」と呼ばれた塔が立っていたからである（写真3）。

「火の見櫓」の頂上には、屋根がついた台があり、その屋根の下に釣り鐘がぶら下がっている（写真4）。この釣り鐘は、現在史料館に展示されている。地区で火災があれば、消防団員が鉄塔についたはしこ



写真3 火の見やぐら前での深江消防組



写真4 火の見槽 (飯田春美氏提供)

を駆け上がり、木桶で鐘を打ち鳴らす。遠くであれば「カーン、カーン、カーン」と緩やかにうつ。ちょうど人が数字を数えるのに「いち、に、さん」と口に出す程度の速さであろうか。火の手が近ければ「カンカンカン」と隙間なく連続に打ち鳴らされる。早鐘である。早鐘が鳴れば地元の人を家までて火元を探る。戦後の早鐘で多くの人の記憶に残っているのは、新道沿いにあった「天理教」の道場が全焼したときであろう(後述)。消防団は、深江が神戸市に合併されるまでは深江村の団であった。団員はもちろん近所に住む深江の村人で構成されていた。毎年正月には団員が深江の町を廻って「寄付金」を集めていたが、昭和の終わりがころになって、当時の財産区の会長の判断により寄付金集めは休止された。その代わり、深江財産区から相応の金銭が支給されるようになった。それに伴い、地域の安全を守る消防団の団長は深江財産区のメンバーとしても参加するようになった。消防団屯所の少し南に「小川ふとん店」があった。今ではふとん店とい



写真5 小川ふとん店 (藤本吉江氏提供)



写真6 小川ふとん店から石田の菓子屋を見る (藤本吉江氏提供)

おいてある。台の奥には入口に向かって、玩具類がぶら下げ付けられた板が立ててあった。駄菓子屋は深江南地区ではこの「石田」と東町(現・深江南町)丁目)の「カタオカ」という二軒しかなかった。駄菓子屋は地域の子どもの社交場でもあった。駄菓子屋さんは、菓

うよりファミリーやインテリアを行う工務店のような店になっている。この付近では最も古い店の一つで、店構えも大きなものである(写真5)。店は自家用トラックを持っていた(写真6)。今では布団は羽毛や化学繊維のものも増えている。昭和時代では布団といえば綿入りの製品しかなかった。綿入りの布団は季節ごとに綿を手入れする必要がある。手入れは「綿の打ち直し」という作業で、たいていの家庭は「布団店」でそれをしてもらっていた。「小川ふとん店」のおもな営業は布団のうち直しであったようである。札幌通と新道が交差する西北角に子ども達が「石田の菓子屋」と呼ぶ駄菓子屋さんがあった。店の中は広いけれど薄暗い。広い土間の中に菓子類を入れた二層四方ほどのガラス張りのケースが並んだ台が



写真7 野田家の葬儀の車列 昭和36年6月18日(野田正雄提供)



写真8 昭和34年の永井彦右衛門商店

子、玩具を季節によって少しずつ変化をもたせていた。子ども達は店をのぞき、並べられている商品によってその遊びに変化をつけていた。年末には鼠やコマ、春以後はビー玉(ラムネ)、メンコ(ベッタタン)。夏になればサイダー、ラムネ、アップル(リングコ味の飲料)、虫取り網や竹製の虫カゴである。

駄菓子屋さん「石田」の西隣が岡田さんで、屋号は「岡富(おかとみ)」である。荒物を取り扱っていて鍋、釜、火鉢、干物用の網などをおいていた。この店のご主人

は「御詠歌」の元締め、導師として知られていた。「岡富(おかとみ)」の西に「寺田自転車店」。この自転車店は大日神社近くの「西澤自転車店」と並んで新品の自転車を多く置いていた。寺田自転車店の西が「永井商店」(写真7、8)。この店の経営者である永井氏も近隣有数の土地持ちであったという。平成の今は、昭和の時代の店構えの面影はなく、同じ場所には同家の経営する通称「永井のマンション」が建っている。



写真9 野田理容館

永井のマンションの通りを挟んで西に「野田理容館」(写真9)がある。野田理容館は初代の野田正威氏が戦後まもなく開業し、令和の今は三代目となる。店は二代目に移ったところ、国道四三号線の用地買収や工事に伴い場所が少し北に移動した。更に三代目になった店は、前面がガラス張り洋風の構えとなつてその名もフランス語を使ったものとなった。この店は幾つかある理容店でも戦後から今日まで続く数少ない店でもある。

新道の北側の家並み

先に書いた「おかとみさん」から新道を挟んで北側に「布施タバコ店」。店ではタバコを販売していたが、この店は「尾布」の行商で知られていた。布施タバコ店を東に向かうと片田家が札場通りに面してあり、通りの東に「信親寮」があった。木造二階建てである。寮は深江の稲荷筋にも同名の寮があった。稲荷筋の寮と同じく深江浜にある現在の新明和工業（旧川西航空機甲南工場）の社宅であった。建物配置は稲荷筋の寮とは同じで札場通りに向かって「コ」の字型に立てられている。場所は現在の国道四三号線大日交差点の国道中央になる。

稲荷筋の寮は現在のコープ深江店ができる昭和三十六年まであったが、こちらの寮は、昭和三十年はじめて国道四三号線の工事に伴いとり壊された。寮は昭和二十年の空襲によって西側の一部が焼けていた。この建物には戦災で焼け出された家族の幾組かが住んでいた。その住民のなかには一室をベニヤ板で区切って「二戸」として住んでいた家族もあった。国道四三号線工事に伴い寮に住んでいた人々は、代替住宅として神戸市宮住宅が提供された。その市宮住宅は見附町に新築されて木造平屋の二戸または四戸連棟の住宅である。

その市宮住宅も一〇年あまりで取り壊された。敷地の一部が神戸市の「深江南老人いこいの家」を経て「深江南地域福祉センター」となった。「深江南地域福祉センター」として今では地域の人々の老若男女が様々な活動に利用しているけれど、この敷地がかつての戦災の痕跡を引き継いだ歴史を持っていることを知る人は殆どいない。

信親寮の東に炭燃料を扱う屋号が「丸吉（まるよし）」という店。経営者は古くからの深江の住民で前中さんである。この店は特段大きなものではなかったが、昭和三十年台初めにこの近隣では二番目に置かれた電話があった。最初に電話が置かれた店は新道南にある「飯田米穀店」であった。

青少年や子供のために

燃料店から二軒おいた隣に天理教の教会があった。教会を運営されていたのは、深江で古くからある推野家である。推野家は、深江では古い家柄の一つであるとともに地主でもあった。たとえば、現在の神戸大学海事学部のある付近の土地も、推野家の所有地であった。この土地は高橋川の北にあって川面よりかなり低い土地であり、いわゆる「ふけた」で使い物にならない土地であった。二東三文で処分したものである。また、現在の芦屋カントリーの敷地になっている土地の一部も同家の所有地であった。

現在の当主は推野義弘氏である。以下は推野義弘氏から平成二十八年九月に筆者が聞き取りした話をもとにまとめたものである。

昭和二十四年から二十五年というわずか一年間であったが、天理教教会の中にダンス練習場を作った。その広さは畳二〇畳ほどの板張りで素足で踊るため床を磨き上げた。普段は礼拝場として利用されているが、礼拝の終わった夕刻から数時間を地域の若者のために開放したのである。

ダンスミュージックは推野家にあった蓄音機から新たに購入したスピーカーを通してながした。ダンスの教授は推野芳雄氏である。氏は「モダンボーイ」として神戸の繁華街で少しは知られた人であった。ピリヤードの名手でもありそのころに行われたピリヤードの全国大会にも出場した。多少自力で流ではあるが教えたのである。教会をダンスホールとして開放し、自ら参加者に手をとって教えたのは氏の地域への貢献の手段でもあった。同時に天理教の教えにも沿うものであった。

終戦から三年ほどしかたっていない。そのころ、とくに若者の心は決して平穏ではなかったようである。教会の礼拝場を開放したのは、深江の若者が「グレル」ことがないように、あるいは健全な男女の交流のきっかけになるようにとの思いで芳雄氏の思いがあった。

昭和二十年代半ば以降から、ダンスは若者の間では一つの流行でありファッションにもなった。大学生の間では自らダンスパーティを企画することもしばしばみられるようになった。それらのパーティは若い男女の出会いの場にもなったが、大人たちの目には決して善きものとは映らなかつたようである。教会をダンスのために開放することはわずか一年で終わってしまったのはそのような世間の目もあつたせいかもしれない。

天理教の教会の西に椎野家の住まいがあった。住まいの南が新道に面している。ここで椎野家はアイスキャンデーの製造販売を終戦後すぐに始めた。一馬力のモーター付きの製造機を購入し、店先で製造し販売した。通りからはアイスキャンデーが作られている様子が見えた。一軒四方ばかりの鉄板にアイスキャンデーの大ききの穴がずらりと並び、その穴が一本一本のキャンデーになった。昭和二十四年当時アイスキャンデーは一本三円で、昭和二十五年以降は五円になった。

飛ぶように売れて夏の二カ月の売り上げで一年分の生活費がまかなえたというほどであった。アイスキャンデーの季節には少し早い時期、「卯の花祭り」(大日神社例大祭、いわゆる深江の祭り)にはキャンデーを作り、貯蔵して子供たちに無料で配ったので大喜びされた。

子どもが喜んだといえは、アイスキャンデーの製造販売以外に子供向けの「貸自転車」、今でいうなら自転車のレンタルを営んでいた。レンタルサイクルは、今日では観光地に行けば時折みられるが、都会に近い深江にもあつたというのは時代のせいであらうか。戦後間もないころゆえに、自転車といえども子供の遊び用に自転車というのは贅沢品であつたのだ。大いに繁盛したという。

大人用自転車であれば二〇インチ以上であるけれど、子供向けだから一二号から一八号の自転車を中心であつた。自転車だけでなくより小さい子供向けに「足ふみスクーター」というものもあつた。キックスケー

ターとも呼んだ。

昭和二十九年十月十四日の深夜三時、天理教の教会や民家が全焼した。深江消防団の屯所にある火の見櫓から早鐘が打ち鳴らされた。人々は深夜にもかかわらず何事かと寝床から飛び起きて外に出た。

教会付近は、かつての空襲を思わせるように夜空を明るく赤く染めて燃え盛っていた。この火事は、人によれば昭和二十年八月の空襲以外では一番大きな火事であつたという。

現場検証の結果は、いわゆる火の不始末ということであつた。現場検証はひどく簡単に終わったことに教会の人はやや不満と不信感を持つたという。そのせいもあつて永らく「あの火事は放火であつた」といううわさが付きまわつていった。

火事から数年後、新道は拡張され国道四三号線となり、教会も国道の北の現在地に移転した。教会の火事のこと、ダンスホールのこと、新道が消えて国道四三号線完成とともに地域の人の記憶からも消えてしまった。

本稿は、平成三十年から平成三十一年にかけて、深江生まれ深江育ちの藤本吉江さん(昭和十年生、大西令子さん(昭和十年生)、野田正雄さん(昭和二十年生)、谷岡尚武さん(昭和二十年生)、新田誠さん(昭和二十五年生)から森口健一が聞き取った内容である。飯田一雄、松下芳子、増田行雄ら深江塾のメンバーの意見を聞きながら文章化、大田正美が修正したものです。

深江にあった戦争 3

深江塾

川西航空機甲南工場

北青木一丁目には神戸市営住宅が建ち並んでいる一角がある。阪神電車深江駅と青木駅の間の北側、本庄共同墓地の西隣りである。この場所は昭和二十年（一九四五）、幾度かの空襲によって損壊、消失するまでは川西航空機甲南工場の労働者のための寮があった。十数棟からなる木造の建物群からなり、敷地内には独立した調理室、食堂もあった。

川西航空甲南工場は、寮から阪神電車の踏切を渡ると徒歩で五分ばかりで工場の門に着く。本庄村のほぼ中央の海岸に昭和十七年に海軍の航空機製造を目的とした工場ができた。海岸の砂浜を含めると一辺が三〇〇に近い四角形の広い埋立地に立地する工場である。敷地は北側に旧国道（現在の国道四三号線・旧国道は新道ともいわれた）に面しており、道路に面して五つの門が東西に並んでいた。工場敷地内には北から順に「翼組立工場」「機体組立工場」「総組立工場」と三つの工場が配置されていた。（図一）。

これら工場があった敷地は、社名が「新明和工業」となった今も本庄の海岸に突き出している。深江の海岸に出て西を見れば、岸から海に突き出した工場が見える。

昭和二十年五月、中山正男は一八歳になっていた。戦時徴用工として昭和二十年の初めから甲南工場で働いていた。一五歳で本庄高等小学校を出てから、父の漁船に乗り組んではぼ九三年がたっていた。漸く漁師としてのイロハが身につけられたかと、自分では思える時期に來ていた。戦局が厳しくなる中、正男もお国のためにと漁船から降りて工場で働くことになったのである。

この頃には、男子中学生（旧制）はもとより女子生徒も軍需工場で働くようになっていた。甲南工場には近隣の学校のみならず四国方面の学校からも徴用工として働きに來ていた。

五月十一日の朝、いつものように粗末な朝食を食堂で済ますと、仲間たちと共に浜の工場に向った。門番小屋で入場検査を受けて、自分の持ち場がある建物に向った。工場敷地の南端にある最も大きな建物で「総組立工場」である。工場内は流れ作業で検査や組み立てが行われていた。正男は航空機の翼についての速度調整機弁の検査部門で作業をしていた。

空襲からの避難

午前の作業が軌道に乗り出した頃、空襲警報が鳴った。その日まで、警戒警報は何度か鳴ることはあった。警戒警報では避難命令は出ることとはなかった。その日は警戒警報が鳴ったけれど、正男には避難命令



写真1 『本庄小国民学校沿革史』に記載された5月11日の空襲（『本庄村史』より）

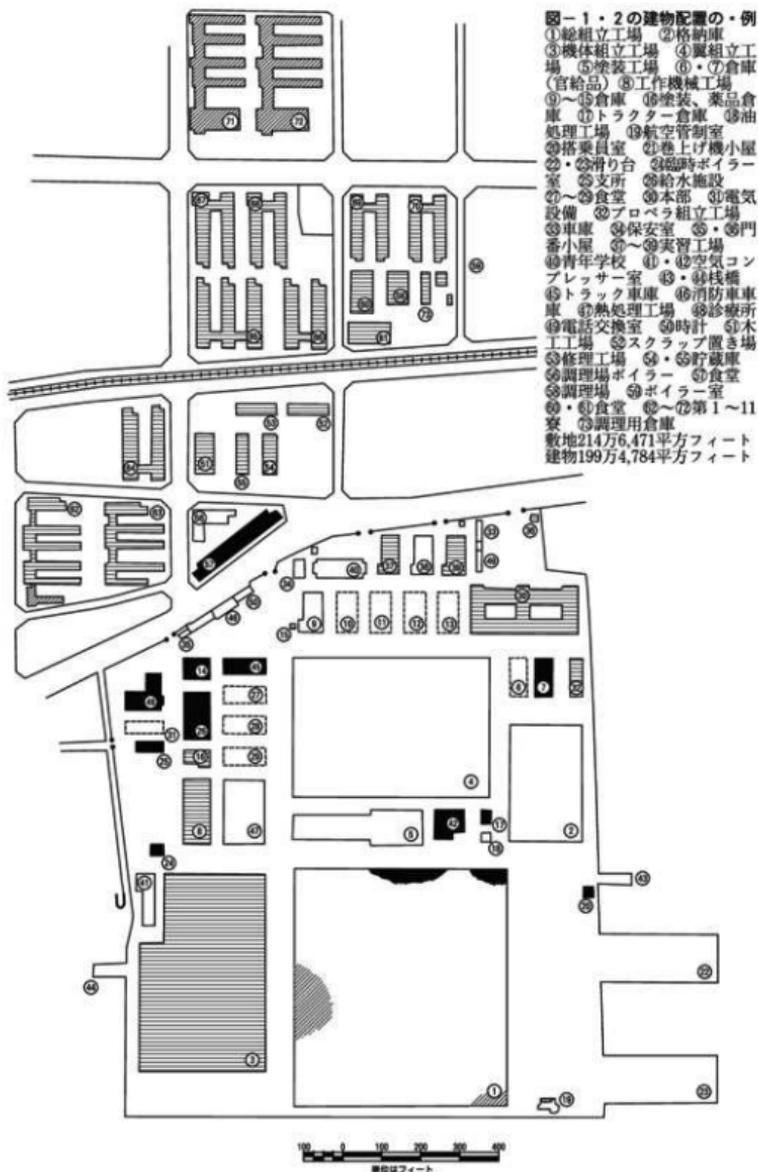


図 昭和20年5月11日の爆撃による被害(『本庄村史 歴史編』より)

が出されたという記憶はない。

警報が鳴って数分もたたないうちに爆音が聞こえてきた。だんだんその音は大きくなる。三月には神戸の西のほうが大空襲にあったという事は正男たちも聞いていた。

「川崎や三菱の軍需工場があったからやられた」「今度は深江の、川西航空もやられるかもしれない」と仲間のうちでは話していた。作業員たちは工場の外に飛び出した。今までは、警戒警報があっても爆音は、るか上空や遠くの空から聞こえてくるだけであった。

工場の外に出て南の空を見ると、点々と浮かぶ雲の間から四つのエンジンをつけた大きな飛行機が次々と姿を現してくる。工場のはうに向かってやってくる。避難命令が出たかどうかはどうでもよかった。

正男たち作業員たちはいっせいに走り出した。あるものは再び工場

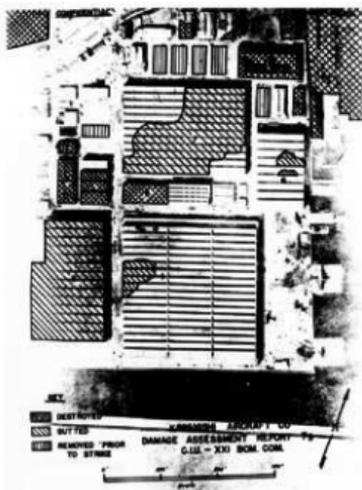


写真2 米軍第21爆撃機軍団「作戦任務報告書」『損害評価報告』に添付された写真（昭和20年5月24日撮影、大阪国際平和センター蔵、『本庄村史』より）

の中に入っていく。建物を守ってくれようと思ったのであろう。正男は総組み立て工場から工場敷地の東寄りを見守る方向に向かって走った。南からやってくる敵機が少しでも遠くに行きたいとひたすら走っていた。工場の門の近くに来たときには、先頭の敵機はすでに上空に来ていた。後のほうでは連続して爆発音が聞こえる。時折全体を上からや横から押し付けるような風を感じた。「爆風」というものを彼は初めて身をもって知った。工場の南の海や工場の敷地の南端のほうに爆弾が落ちているようであった。身を低くしながら走った。走りながら正男は何度か振り仰いだ。噂には聞いていたが、聞きしに勝る巨大な飛行機である。長い翼にそれぞれ二発、計四発のエンジンをつけ、銀色に光る爆撃機B29である。それまで見たこともないほどの低い空を飛



写真3 川西航空機甲南製作所に投下された500ポンド爆弾の着弾点（『戦略爆撃調査団報告』関西大学蔵、『本庄村史』より）

んでくる。次々と数機ずつ編隊を組んで南西の空から六甲の山並みの東のほうへ向かって飛んでゆく。爆撃機の胴体の中央部の下にある爆弾倉の扉が開いているのまで見える。編隊は本庄の、深江の空一面を覆うように通り過ぎてゆく。巨大な渡り鳥の集団が通り過ぎて行くようだ。

正夫は神戸高等商船学校の正門から森村のほうに伸びる道を走った。東に深江の駅をみて阪神電車の踏切を越えた道の西側に防空壕があった。川西航空機と共に深江にあった軍需工場である。入れてもらおうと壕をのぞいた。壕の入り口まで人が入っていた。

彼は、壕に入れたらうことはあきらめて再び北に向かって走り出した。上空を爆撃機が次々と頭の上を北東に向かって飛んでゆく。集落全体を包み込むような頭上からの爆音と、背後から聞こえてくる爆発音と爆風を感じながらひたすら山手、神戸薬科専門学校の方面に向かって走った。新道（現在の国道二号線）に出るまでの、自分が今逃げていくその道には幾本もの電柱が倒れている。道中に電線がのたうている。それらをよけながらまた北に向かって走る。

道の端に倒れている人を見えた。けがをしているのか、死んでいるのかわからない。どこかで被害にあっただけで逃げてきて力尽きたのか。正男は倒れている人を横目で見ながら、また北に向かった。

彼が阪急電車の高架をくぐろうとしたとき、B29の編隊の第二の集団がやってきた。爆音が遠雷のように響いてくる。倒れた人を見捨てて逃げてきた事は辛い気持ちもあったけれど、「自分も今度はあの姿になるかもしれない」と自分に言い聞かせた。「ともかく山へ、薬専（現神戸薬科大）の方へ行こう」と向かった。省線（現JR）を越え、阪急電車の高架下をくぐりぬけて漸く雑草と低木の繁る山の斜面に座り込んだ。空襲警報を聞いて工場から逃げ出してからどれくらい時間がたったであろうか。

敵機が去って

正男には時間の感覚がなくなっていた。爆発音はもう聞こえない。B29の編隊の爆音は東のほうへ遠ざかって行った。深江の駅から南西の方向、川西航空機の工場、神戸高等商船学校（現神戸大学海事学部）、あるいは本庄国民学校のあたりから黒い煙が上がっている。阪神電車の北側に並んでいた会社の寮付近からも火炎と黒煙が混じって上がっている。それらは正夫の目には深江の集落全体が燃えているように見えた。

朝から空を覆っていた雲と空襲による火災の煙とが入り混じった空から雨が降り降り出した。黒い雨であった。

日暮れが迫ると共に空を覆っていた黒煙も消えてきた。彼は工場ではなく自宅にむかった。自宅は工場から東へおよそ一キロほど離れた場所にあった。今の深江南町二丁目の海岸近くである。自宅は無事であった。家に入ると正男の姿を見るなり父は「お前はやられたとあきらめていた」と驚きながらいった。

父は前夜（五月十日）に「夜うたせ漁（打瀬網による夜の漁）」に出ている、五月十一日の空襲の朝は漁から帰って自宅にいたのであった。朝がた漁から帰って自宅で寝付いたころ空襲警報が鳴ったのである。爆音は南、西のほうに聞こえた。その方向を見ると南のほうの雲間を通しては、今まで見たこともないほどの飛行機が編隊を組んでこちらの方にやってくる。パラパラと爆弾を落としながら川西航空の工場あたりの上空にやってくる。工場あたりからは雷が連続して落ちるような爆発音が聞こえる。黒煙が上がる。工場あたりは爆発音と黒煙に包まれている。父は「正夫はあの工場にいる。やられているだろう」。爆死がどんなものか、どのような様子なのかは父も見ることがなかったけれど、大怪我をして倒れている息子の姿を想像した。

父が息子の「死んだ」姿を想像している頃、正男はいち早く工場か

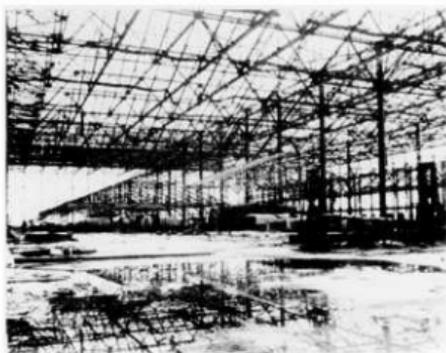


写真4 川西航空機の機体組立工場の南東

写真5 同工場の機体組立工場内部（いずれも『戦略爆撃調査団報告』
関西大学蔵、『本庄村史』より）

五月十一日から終戦まで工場で働く中で、この工場を中心とした空襲のおぼろげながら全貌

たという。

毎日、工場に行く道すがら工場の東に隣接する神戸高等商船学校はコンクリートの建物以外は皆無残に真っ黒に潰れたり焼けたりした現場を見ることになった。正男は、空襲の幾日かあと、神戸商船学校の学生二名を高橋川の河口の浜で茶毘に付される様子を見た。この学生たちは当日「御真影」警護のために配置について、至近弾の爆風に二〇呎ばかりも吹き飛ばされて着剣した銃を握り締めたまま亡くなったという。

工場にむかった。工場からは「被害の軽い、稼働できる機械で直ちに作業を開始する」と告げられた。それからおよそ一カ月間ばかり、彼は再び工場で働いた。

空襲の後で船を高橋川で確認した後、正男は

中山の船の反対側に係留していた二艘の船は船腹が割れてしまっていた。そのうちの一艘は深江の漁師の寺田政雄さんの船であった。寺田さんの漁船にまつわるものには後日談がある。寺田さんは戦後もなくこの船を廃船にして新しい船を購入して漁業を続けた。その漁船には寺田さんの一九歳になる息子と一七歳のもう一人の深江の若者が乗り組んで漁業を続けた。昭和二十八年十一月二十八日、突然の嵐のためその船は沈没し二人の若者が亡くなった。沖に漂う船だけが仲間の漁師たちによって高橋の港の岸壁に引き上げられた。若者二人はついに行方不明のままである。長い間、誰もその船でもう漁に出ることはなかった。船主にとっては自分の船の二代続いでいるの災難であった。

ら離れ山のほうへ避難していたのである。

翌朝、正男は高橋川の河口に留めてある父の船を見に行った。高橋川の西の岸と神戸高等商船学校の敷地の間に爆弾が落ちた跡があった。中山の漁船は八尋船という三本柱の比較的大きな打漁船であった。新造して三年、三本柱の真新しい船である。爆風のため船腹がゆるんで少し隙間ができていた。三本柱の帆柱のうちの「とも柱（後の柱）」は、直径が一〇呎、長さ五呎ほどのいわば丸太である。その柱が、爆風のためか、破片のためかはわからなかったが、縦にまっすぐに裂けていた。正夫は「とも柱はやりなしたが、船はもちそうだ」とほっとした気分になった。

がわかってきた。その日の空襲は、サイパン島からやってきたB29のおよそ六〇機の集団であること。投下された爆弾は五〇〇ポンド爆弾（二二〇×二五〇ポンド爆弾）であること。工場の敷地内には一〇〇発以上が落ちたこと。工場の関係者に三〇〇人くらいの死傷者があったこと。更に、隣接する学校の岸壁で食料品の荷揚げ作業の関係者が巻き添えで多くの死傷者が出たこと。

これらの多くの死者の取り扱いは非常時のために多くの困難があった。普屋中学（現・県立芦屋高校）の生徒であった太田恵造氏は、空襲を受けた地域の残骸始末のために動員されていた。空襲の当日から数日後、遺体が工場の北側の道端で茶毘に付されているのを見た。身元が確認できないまま茶毘に付しているのであろうか、作業している人々は家族ばかりではないようである。太田氏たち中学の生徒は命じられた作業に取り掛かることもできず、集めた木材で遺体を焼く作業を手伝うことにした。作業をしながら聞くともなしに聞こえるのは自分たちと同じ年代の若い人であるという。自分たちはまだ徴用工ではなく、勤労奉仕でその作業は空襲の後の残骸処理（壊れた建物などの金属類を回収する作業）である。そのために、このような危険な目にあわなかった。あまり年齢の変わらない若者が戦場に倒れ、困るために知じたのだ。太田氏は茶毘の作業の手伝いをしながら自分が果たして本当に幸運なのか、なんとなく申し訳ない気持ちになった。そう思うと涙があふれて止まらなくなった。

戦争は終わったけれど

六月の半ば、あの空襲の日からひと月が過ぎた。父が「正男、日生へ帰ろう」といった。岡山の日生は父の生まれ故郷である。船で岡山に行くという。中山の家族は、正夫と父が中心となって、すぐに日生に向かって出立できるように準備に掛かった。日常生活に欠かせない身の回り品や貴重品をまとめた。家族みんなで高橋川河口にとめてあ

る船まで運んだ。

まだ明けやらぬくらいうちに深江を出た。川西航空機甲南工場、正夫たちが働いていた組み立て工場は屋根の大部分は吹き飛んでいたが、骨組みだけは原型をとどめている様子が、船からはよくわかった（写真4、5）。甲南工場の南をぐるりと西に廻って、出来るだけ海岸近くを青木、魚崎、御影と進んでいった。

岡山の日生で終戦を知ってから暫くして中山の家族は、再び深江に戻ってきた。中山の家は焼けてなくなっていた。深江の村は、五月十一日の空襲のあと、八月六日の夜に大規模な空襲を受けていた。その空襲は焼夷弾による空襲で村の家々の多くが焼かれた。五月の空襲のあとで、父が「日生へ帰ろう」といったのはよき判断であった。家は焼けたけれど、家族全員が無事であったことは不幸中の幸いであった。

終戦からしばらくして二人の同級生の消息を聞いた。彼らは同じ本庄の学校を卒業し、深江の沖で漁業に携わった仲間でもある。同じ同級生の一人は、海軍に志願した。ウラジオストック方面で沿岸封鎖の作戦に従事していた。その作戦に参加した三隻のうち、二隻が敵にやられて沈んだ。乗り組んでいた艦は幸い被弾することなく無事帰還した。

もう一人の同級生は、志願兵として満一八歳になると同時に陸軍に入隊した。入隊して短い訓練の後、輸送船で南方方面に出陣した。初陣である。戦地に着く前に、輸送船は沈められ、戦死した。二人の墓は、本庄墓地にある。

本文は、中山正男氏（昭和二年生）からの聞き取りをもとに『神戸商船大学七十五年誌』、『神戸薬科大学年史』、『本庄村史』並びに県立芦屋高校五期生の卒業五十周年記念誌『芦屋五会』（二〇〇〇年）を参考にして作成した。

阪神電車の高架事業で変わる深江の風景

研究員 藤川 祐作

明治三十八年（一九〇五）阪神電気鉄道株式会社は、梅田（出入橋）―三宮間に電車を開通した。ここ深江付近では自然浜堤（砂嘴もしくは砂丘）上に軌道（線路）が敷かれた。平成十八年（二〇〇六）から始まった魚崎―芦屋間の高架工事に先駆けて、史料館は変貌する沿線を、カメラを通して記録するべく努力した。工事前、工事中の写真を紹介したい。

高架工事に先駆けて行われた埋蔵文化財の調査では、本庄小学校・中学校一帯では弥生時代前・中期の土器や、同中期の方形周溝墓、奈良・平安時代の掘立て柱建物や、馬の骨や目穀などが確認され、現地説明会が開催された。本庄小学校の西では関連工事で銅鑄が出土し、現場が一時騒然となり、周辺を土ごと取り上げ持ち帰ったとのこと。これらの成果をもとに地元東灘小学校で出前授業が行われた。

下り線開通では、線路を歩くイベントが行われ、一二〇人ほどが参加したとか。また神戸大学工学部の学生二十数人が授業の一環で工事現場の見学会を企画した。

全線開通式は令和元年（二〇一九）十一月三十日に青木駅で行われた。青木駅の構内には「東灘区とともに歩む 阪神電車の歴史」と題して、開通から現在まで一十四年間の出来事二十数項目が、それぞれに写真を添えられて年表形式で紹介されている。写真は、神戸深江生活文化史料館が『本庄村史』編纂の過程で収集したものを提供した。深江のみなきまもぜひ一見を。

今年から始まった上り架線の撤去、側道などの整備に数年を要するが、その後、高架下の活用がこれまでの深江の町をさらに進化させる

ことを願うものである。



写真3 駅の北と南を結ぶ地下道と地下改札口（2009年1月）



写真1 南東から見た着工前の深江駅（2002年3月）



写真4 深江駅東側踏切に立っていた看板（2019年11月）



写真2 高架が立ち上がった後の深江駅（2019年5月）



写真9 深江駅南西から見た駅舎 (2002年9月)



写真5 深江駅東の踏切から北を望む (2003年1月)



写真10 深江駅南側のビル2階から見た駅舎 (2011年1月)



写真6 大日神社西側から深江駅東の踏切を見る (2014年4月)

写真11 葉王寺踏切から東方面にある深江駅を望む
(2002年8月)

写真7 深江北町3丁目方向から深江駅を望む (2008年1月)

写真12 葉王寺踏切から東方面にある深江駅を望む。
下りの高架はほぼ完成 (2014年4月)写真8 札幌通踏切から西方向にある深江駅を望む
(2015年8月)



写真17 深江薬王寺踏切から東を望む (2002年8月)



写真13 深江北町3丁目から東方向を望む (2002年2月)



写真18 深江薬王寺踏切から西を望む (2014年4月)



写真14 深江駅東踏切から東方向を望む (2014年4月)



写真19 下りホームから東方向を望む (2015年12月)



写真15 栄通踏切の南東側から西を望む (2002年2月)



写真20 史料館が提供した写真で作られた東海区歴史年表 (青木駅構内)



写真16 深江北町1丁目から東方向を望む (2002年2月)

小学校で糸車実演

神戸海星女子学院小学校には一月二十六日に糸車を貸した。写真下。小学校の教科書に「たぬきの糸車」(岸なみ作)がある。人間とたぬきのほのぼのとした交流を描いた民話で、いたずら好きのためきが女性に助けられ、留守の間に、糸車を回して糸をつむぐというストーリー。児童からは「回る音が面白い」「初めて見た」などの感想が寄せられた。

西宮市立郷土資料館の特別展

西宮市立郷土資料館では、七月二十日から九月一日まで、特別展示「すなどりの具〜西宮の漁具〜」が開催され、史料館からモンドリカゴ、ウキ、タコツボ、イカ釣り仕掛け、イカ釣り針、竹針、竹針や網補修セット、大漁旗などを御貸しした。期間中の入館者は四一七八人。なお漁具の半数程度が、九月十一日付で市指定重要文化財となった。



編集後記

今年度は小学校の見学が大幅に減少した。教科書の内容の見直しで「昔の暮らし」のページ数が減少したことが背景にあるらしい。わざわざ校外学習までしなくても…と効率優先の判断が働いたのではと推測している。小学校で英語が始まるなど授業の密度は濃くなっている。先生の気持ちもわかる。しかしこの史料館に来れば、教科書にない多くのことが学べることも分かってほしい。実物を見たり触った感動は何物にも代えがたい。

史料館日誌抄

史料館副館長 道谷 卓

二〇一九年四月〜二〇年三月

- △二〇一九年▽
- 6月28日 南五葉小学校 六年生 (見学者 四八名)
- (二〇一九年)
- 1月10日 高羽六甲アイランド小学校 三年生 (見学者 一〇名)
- 1月16日 木山南小学校 三年生 (見学者 八〇名)
- 1月23日 鶴甲小学校 三年生 (見学者 七一名)
- 1月24日 西脇小学校 三年生 (見学者 六一名)
- 1月30日 福住小学校 三年生 (見学者 八五名)
- 2月4日 本庄小学校 三年生 (見学者 一四四名)
- 2月6日 御影小学校 三年生 (見学者 九九名)
- 2月13日 灘小学校 三年生 (見学者 五二名)
- 2月13日 宮本小学校 三年生 (見学者 六四名)

資料寄贈者ご芳名

(敬称略)二〇一九年四月〜二〇年三月

東谷陽子／藤川耕策／井上宏／岡本智子／大西令子／山田義貞
(藤川祐作記)

『生活文化史』 第48号 2020.3.31

編集 大國正美

発行 神戸深江生活文化史料館

〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-1-5-17

☎ 078-45314980 (FAX兼用)

http://fukae-museum.ta.coccan.jp/